

体育科 「 課題の解決に向けて“運動の楽しさ”をそうぞうする子どもの育成 」 ～できる・わかるを積み重ねる授業～

東 亮多・富嶋 瑛

1 体育科における未来そうぞう

体育科におけるめざす子ども像は、「運動の楽しさ」をそうぞうしながら学ぶ子ども」である。
以下に「運動の楽しさ」と「そうぞうしながら学ぶ」ことを定義する。

“運動の楽しさ”とは…

「そうぞうしながら学ぶ」とは…

運動することを通して、

①分かっていることと、できることの差を埋める

(できる・わかる)

②仲間と繋がっていくことと、捉えている。

「そうぞう」には、イメージの想像とクリエイ

トの創造という2つの意味を含んでいる。「イ

メージ・クリエイト」を往還させながら、「でき

る・わかる」を積み重ね、課題の解決に向かっ

ていく過程と、捉えている。

2 「未来そうぞう」と体育科の関係

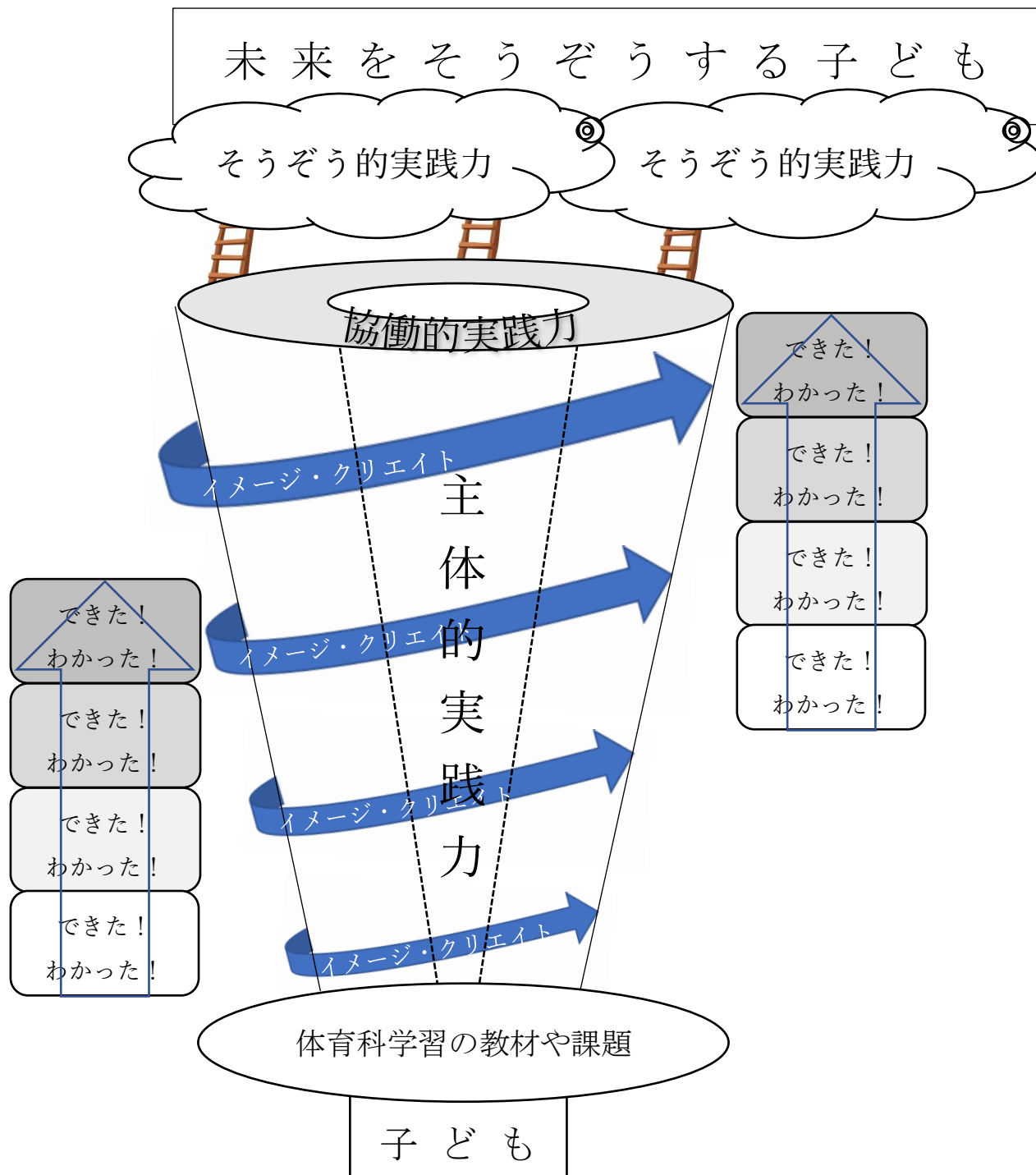
(1) そうぞう的实践力を発揮する姿

体育科学習では、体を動かすことが主な活動である。体を動かすことを通して人と繋がることは、その良さの一つである。チームとする運動ではもちろん、個人の記録を伸ばしたり、技を磨いたりするような場面でも、子どもたちの中で、友だちと協力して学習することは自然である。そして、友だちができた時の喜びを、自分ができた時の喜びのように感じられた時、教師がそれを価値付け、その良さを実感させる。体育科学習の一連の活動からこれらのことを経験したり、感じたりできることは体育科の特性といえる。体育科では、この特性を生かし、そうぞう的实践力を発揮する姿を表1のように明記する。

表1 『課題の解決に向けて“運動の楽しさ”をそうぞうする子ども』

【そうぞう的实践力を発揮している姿】	
○自分自身や友だちと、試行錯誤しながら粘り強く考えたり、練習したりしながら、新しい視点を見出し、「できる・わかる」を積み上げ目標に近づいていく姿	
【主体的实践力を発揮している姿】	【協働的实践力を発揮している姿】
○各種の運動の特性に応じた行い方について理解しようとしている姿	○約束を守り、助け合って運動をしたり、友だちの考えや取組を認めたりする姿
○基本的な動きや技能を身に付けようとする姿	○課題の解決に向けた学習の中で、人と繋がりながら学んでいる姿

【体育科からアプローチする未来をそうぞうする子どもへのイメージ図】



体育科学習の教材や課題との出会いから、イメージ・クリエイトの往還を繰り返しながら、できた! わかった! の差を埋めていく経験を積み重ねていく。子どもたちの主体的実践力をベースとした力が、協働的实践力を纏い、太くなっていく。最後のそうぞう的实践力へのはしごとなるものは、教師の手立てや、自分の経験や友だちとの交流から得たものと考えている。

【イメージ図と児童の様子とのすり合わせ】

児童の様子から見る、未来をそうぞうする子どもへの迫り方

4年生ゲーム運動領域「アルティメット」A児の場合

ある児童は普段あまり自分の意思を強く出さず、周りに合わせて物事を前に進めることの多い児童であった。(以下A児)

A児は、4年生の時、アルティメットの学習をした。初めて触るディスクの操作では、楽しみながら、やり方を理解し、できることを増やしていった。しかし、ゲームになると、チームは全く勝てなかった。結局、A児のチームは、まとめの大会まで、一度も勝つことはなかった。そこでチームにトレードを提案した。ただし、一時的なトレードで、まとめの大会では、元のチームに戻すという案であった。チームでの積み重ねがあればこのメンバーでやり続けることにこだわるのではないかと考えた。すると、A児だけは反対した。「このチームのメンバーで最後までやりたい、それでない意味がない。」とのことであった。その思いに他のメンバーも同調し、もう一度このメンバーであることを選択した。

チームはもう一度、自分たちの力を分析し、作戦を立てた。パスの成功率の低さに気づき、守備に重点を置いた作戦をとった。相手陣地での守備を特に集中するもので、まとめの大会では、優勝したチームに0-1で惜敗した。最後まで勝つことはなかった。悔しくて泣く子もいたが、相手やチームの仲間を責めるものではなかった。試合後にはお互いに健闘をたたえ合う姿も見られた。

⇒チームが負け続けても、粘り強く、自分たちにあった作戦を考え、練習し、その作戦を実行できた。自分の経験や友だちとの交流からそうぞう的实践力をつけていった例であった。

(2) そうぞう的实践力を育成するための手立て

①イメージ・クリエイトを意識した学びのプロセスとそうぞう的实践力との関係

従前の「できる、わかる」に着目しただけでは、子どもたちの学びの結果に注目しがちになってしまい、学びの過程を十分に評価して力を伸ばしていくことができないと考えた。そこで、未来そうぞう科の学びのプロセスにある「イメージ・クリエイト」を「できる・わかる」の前段階のプロセスと位置づけ、着目していくこととした。「イメージ・クリエイト」しているところを教師が価値づけていくことで、その姿が広まり、友だち同士でも「イメージ・クリエイト」のプロセスを踏んだ学びが行われるようになる。「イメージ・クリエイト」を往還させながら、「できる・わかる」を積み重ね、課題の解決に向かっていく姿を目指す。

②対話と体ワ

学習中に子どもたち全員と課題について対話して、その進捗状況を把握し、的確な支援や指導をすることは理想的であるが、現実的ではない。そこで、体育ワーク（体ワ）を学習後に子どもたちが書き、教師がチェックしておくことで、課題の把握や次時への言葉掛け、支援や指導の手掛かりとすることができる。学習中の対話と体育ワークを組み合わせることで、より多くの子どもに効果的な指導や支援を行うことができると考える。また、教師の声掛けは、子どもたち同士の対話も活発にする働

きを持つ。教師の言葉や視点を子どもたちが使ってアドバイスし合えるように意識する。

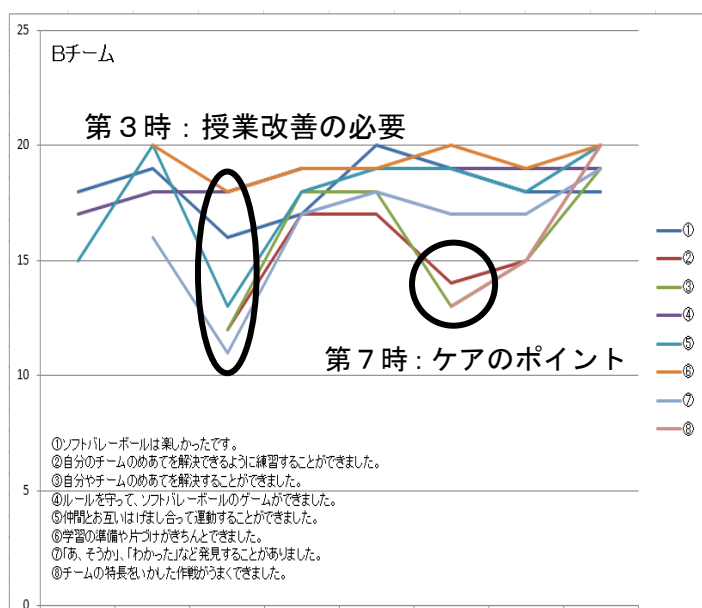
3 体育科における評価について

子どもたちの力を伸ばし、授業改善につながる評価

①形成的評価の活用

体育ワークに下図のような①～⑧の形成的評価の項目を加え、各時間自己評価する。個人やチームごとに分析を行い、チームや個人の状態を明らかにし、次時の授業改善に用いる。また、各チームや個人への声掛けにも活用する。

【チームごとに集計した形成的評価の例】



左図のようにチームごとに形成的評価を集計してグラフ化することで、次時への手立てが見える。

第3時においては、他のチームにも同じ傾向が見られたため、授業改善が必要ながわかる。

また、Bチームにおいては第7時、②と③の項目が有意に落ち込んでおり、この時間、このチームは、めあてに対して活動できなかったことがわかり、ケアするポイントがはっきりとしている。

②対話型の評価

教師と子どもや子ども同士の対話を評価活動の一部と位置づけ、対話型の評価を行っていく。

教師と子どもの対話では、主に上記の形成的評価をもとに、子どもたちへの声掛けを行う。併せて、その時間の姿についても伸びやつまずきを見付け、対話していく。

子ども同士の対話も活発にするため、それまでの教師の言葉掛け、作戦や練習方法の基となるものなど、十分に与えておく必要がある。教室での授業のように時間を区切って対話の時間を設定することはないので、子どもたち同士でも対話ができる素地を作っておくことが重要となる。

対話では、良い、悪いだけでなく、良いのならどこがいいのか、なぜよくなったのか、掘り下げて聞き、わかっていないところや、できていないところを明らかにしていく。課題を共有して次の練習やゲームに臨んでいくことを繰り返す。